

メコン川中流域の諸言語間の言語接触に関する研究 —中国雲南省・ラオス北部を中心に—

林 範 彦

神戸市外国語大学外国語学部 准教授

緒 言

チベット高原から中国雲南省・東南アジア大陸部にまでわたるメコン川の、特に中流域はタイ・カダイ系の諸民族を支配者とする小国が13世紀以降700年以上にわたって栄えた地域である。そこにチベット・ビルマ系、モン・クメール系、ミャオ・ヤオ系の諸民族が主として山地民として生活し、文化的にも民族的にも重層的な世界を構築してきた。当初は各民族が祖先から継承した言語を保存しながら、独自の発展を遂げてきた。しかし、近代に入り国民国家の樹立を見てからは、各国家の公用語の影響が非常に大きく、現在上記少数民族の言語は公用語に取り替わる危機的状況にある。

林(以下、「代表者」とする)はこれまで中国雲南省国境地域のシーサンパンナ州で話されるチベット・ビルマ諸語を中心に現地調査を通じて資料収集を進め、その音韻と文法構造の記述と言語類型論的・歴史言語学的分析に注力してきた。またこの数年来ラオス北部の同系言語のシダ語やムジ語、そしてミャンマー・シャン州に話されるアカ語やラフ語、アク語についても予備調査を進めてきた。この過程でこれらの言語が歴史的に極めて緊密な関係にありながらも、かつての地域共通語であるタイ系言語、そして現在の各地の地域共通語である漢語方言・ラオ語・ビルマ語が重層的に各少数言語に影響を与えていることがわかってきた。

本研究では上記の流れを受け、中国雲南省からラオス北部に至るまでのメコン川中流域に着目し、とりわけチベット・ビルマ系の各少数言語の現地調査と資料収集を通じて、これらの言語間の歴史的な関係と、漢語およびタイ系諸言語の音韻面・文法面に対する借用の影響を中心に言語接触の問題を分析する。そのうえで、本地域の諸言語が相互にいかなる影響を与え合っているのかを解明するのが目的である。

調 査

上記の研究目的を達成するため、本研究期間(平成25年7月～平成26年6月)中にラオス・中国に合計4回の現地調査を行った。なお、同期間中日本学術振興会科学研究費補助事業の助成もあわせて受けていた。公益財団法人三島海雲記念財団からの助成は上記助成と重複しない形で使用させていただいた。

- (1) 平成25年7～8月 ラオス・ルアンナムター県でシダ語・プノイ語の調査
- (2) 平成25年12月 ラオス・ルアンナムター県でシダ語・ランテン語の調査
- (3) 平成26年3月 中国雲南省にてチノ語悠楽方言・補遠方言の調査
- (4) 平成26年5月 ラオス・ルアンナムター県でシダ語・プノイ語・ランテン語の調査

特にラオス・ルアンナムター県での調査は研究仲間であるNathan Badenoch氏(京都大学特定准教授)の協力を得、シダ語の研究については共同で行ってきた。シダ語については基礎語彙・基礎文例調査を完了した段階まで調査できた。またプノイ語は基礎語彙調査として合計で600項目程度を収集した段階である。ランテン語はミャオ・ヤオ系に属するため系統が異なるが、現地の言語状況を理解するために並行してデータを得ている。

中国雲南省では雲南民族博物館・雲南省西双版纳州民族宗教事務局の協力のもと、現地調査の許可を得て研究を進めている。しかし、大変残念なことに、昨今の外交問題による影響から調査が限定されることもあった。本研究期間中では1回しか中国の調査ができなかったが、状況は好転しつつあるので、今後の調査を発展させたい。チノ語については自然発話のデータ収集(悠楽方言)と補充文例調査(補遠方言)を中心に行った。

加えて、本来なら中国側のアク族の言語を調査する予定だったが、状況が難しかったため、平成26年6月初旬ミャンマー・シャン州チャイントン地区に居住するア

	チノ語悠楽方言 (中国)	シダ語 (ラオス)	ハニ語 (中国)
「蛇」	u33lɔ33	u55lɔ55	o55lɔ55
「書く」	pjo55	pjo31	bu31
「柱」	ɛ55khv55	ɣ55khv55	zo55ma33
「ハエ」	ɕo33m55	jo55m31	a55mo55
「村」	tso55mi55	tso55mi55	pu33kha31

ク族の村落を訪れ、基礎語彙約550項目程度を採集した。地理的にはメコン川流域からすこし外れるが、言語的な関連性は極めて大きい。今後も継続的な調査が必要な言語と考えられる。

結 果

ここではこの1年間に行ったラオス北部のシダ語・プノイ語、中国雲南省のチノ語方言の調査から導き出される結果についてまとめた。

従来の研究では中国側の少数民族言語は中国国外の言語との比較研究がなされることが少なかった。またラオス側の言語は調査データが乏しく、そもそも比較できる状況になかった。しかし、Badenoch氏との共同研究によって進めたシダ語の調査データ分析と、代表者が独自にこれまで進めてきたチノ語のデータを比較すると、両言語に歴史的に疑いようがないほどの親近性が存在していることが判明した。なお、シダ語の音韻体系とその特徴については第24回国際東南アジア言語学会（ヤンゴン大学、2014年5月31日）でBadenoch氏とともに共同発表した。

まず、語彙的な親近性である。チノ語は従来中国国内のハニ語との系統的親近性を指摘されてきた。しかし、上表よりハニ語よりもラオスのシダ語のほうが高い親近性を見て取れる（ハニ語データは黄1992より引用¹⁾）。なお、音声記号に付される数字は声調を示している。

表中の「蛇」「書く」などはチノ語とハニ語も形式的に類似している。しかし、「柱」「ハエ」「村」に至ってはハニ語とは類似せず、シダ語と類似していることは明確である。このようなチノ語とシダ語の語彙的な親近性は基礎語彙はもちろんのこと、熟語表現や機能辞にも散見される（例えば、「ずっと休むことなく」：チノ語悠楽方言 thi33la55ma55fɛn44a44：シダ語 thy31le55ma31so55e55、「～したい」：チノ語悠楽方言-nu42：シダ語 nu33、etc）。

シダ語の基礎語彙のなかにはラオス語からの借用語だけでなく、漢語雲南方言からの借用語とみられる語彙が散見される。例えば、faŋ31ko31（＜蕃果?「オレン

ジ」）、li31（＜犁「犁」）、phi31pɔ33（＜皮包「かばん」）、si31pjo31（＜手表「腕時計」）などがある。ルアンナムター県での限られた調査ではあるが、他の言語に比べて漢語からの借用語がより多く見られるようである。

プノイ語についても述べる。ラオスにおけるプノイ語のデータも限られたものしか存在しない²⁾。プノイ語はチノ語やシダ語と同じくチベット・ビルマ系口語群に属する。しかし、他の口語諸語に比べて、代表者のプノイ語のデータは末尾子音の残存率が高い。例えば、「縫う」：プノイ語 kiap31：チノ語 kju55、「熟した」：プノイ語 aŋ33miŋ33：チノ語 mjv44 など。したがって、この点でプノイ語の韻母部分（母音+末尾子音）は古態的特徴を持っていると言えそうである。

しかし、一方で初頭子音が改新的な変化を被っている語彙も見られる。例えば、「深い」：プノイ語 aŋ33da31：チノ語 a55na42、「早い」：プノイ語 da35：チノ語 na42 など。このプノイ語の初頭子音 d-は他言語との比較により祖語の *n- に由来すると考えられる。プノイ語が独自に鼻音から口音への変化を被ったと推定される。

プノイ語にも多くのラオス語からの借用語が散見される。特に数詞はすでにラオス語でしか数え上げができない。ただし、「1」～「3」については「個」を表す maŋ35、an31 を付ければ固有語を引き出すことができる。thi31maŋ35 「1個」、dit31an31 「2個」、sum55an31 「3個」（各第1音節は固有語の数詞）。「4」以上となると、個数表現でもラオス語の数詞を用いざるを得ない。si33an31 「4個」、xa33an31 「5個」、xok55an31 「6個」（両音節ともラオス語からの借用語）などとなる。

もちろん、実質1年間の数次にわたる短期調査のため、明確な結果とまでは言えない。以下の考察でも述べるように今後の分析が大いに待たれる。

考 察

以上、結果とこれまで代表者が行ってきた研究を総合すると、本課題におけるメコン川中流域の言語接触

(ここでは特にシダ語) についていくつかの点を指摘できる。

第1にシダ族の言語生活と言語変容についてである。ラオス・ルアンナムター県のシダ族は元来さらに北側に位置するボンサリ県から移住している。しかし、それ以前は非常に高い確率で中国雲南省から移住したと考えてよい。ルアンナムターのシダ語は漢語雲南方言からの借用語を基礎語彙中にも含んでいる。確かに最近中国側からゴム事業の名目で中国人がルアンナムターに流入している。ただし、これらの中国人とシダ族との間の密接な接触は現時点では確認できない。シダ語内の漢語からの借用語はおそらく19世紀末までに中国領内で漢語話者から得た影響の残存であると見なすべきであろう。

そして大変興味深いことに、ルアンナムターのシダ族はランテン族(ミャオ・ヤオ系)の村に居住していることから、多くがランテン語との二言語併用話者である。中にはシダ語よりもランテン語のほうが自由に話せるという若年層もいるほどである。これが将来ルアンナムター県のシダ語の変容に何らかの影響を与える可能性も考えられる。

第2にラオスのシダ語と中国雲南省のチノ語は上述のとおり、歴史的な近似性を持っていることは確かである。チノ族は中国国務院に1979年に独立した民族として「最後」に認定されているが、中国国外にチノ族が居住しているという報告はない。しかし、代表者のチノ語調査データとラオスのシダ語、さらには同系統とされるラオス・ボンサリ県のムジ語・パザ語・プサン語は歴史的に共通基語にさかのぼれる可能性も出てきた。シダ語・ムジ語・パザ語・プサン語がチノ語と分かれた後、ラオス(一部はベトナム北部)に移動したと推定できよう。

上記の一部はNathan Badenoch氏との共同研究により得た考察である。今後Badenoch氏のパザ語・プサン語の調査データと、代表者のシダ語・プノイ語・アク

語・チノ語の調査データの集積と比較が進めば、中国雲南省・ラオス北部の諸言語における歴史的変遷と言語接触の様相の詳細がより明らかになると考えられる。

要 約

本研究はメコン川中流域のチベット・ビルマ系口頭諸語、特にチノ語・シダ語・プノイ語の現地調査を行い、その調査データをもとに言語系統の親近性と言語接触の問題を分析した。特にチノ語とシダ語では同じ口頭系のなかでも明確な対応関係を見いだすことができる。両言語の全体的な比較を進めれば、シダ族の南下の歴史を解明する手がかりが得られる可能性もある。またシダ語は漢語雲南方言とラオス語の、プノイ語はラオス語の借用語が基礎語彙に見られる。両言語は今後よりいっそうラオス語の影響を強く受けると予想される。

謝 辞

このたびは公益財団法人三島海雲記念財団の学術奨励金を賜ることができ、大変な名誉を感じるとともに、私のアジアの少数言語の研究を奨励していただいたことを心から感謝申し上げたいと存じます。また本研究では中国雲南省に居住するチノ族、ラオス北部のルアンナムター県に居住するシダ族・プノイ族の方々のご協力を得ました。中国では雲南民族博物館・西双版纳州民族宗教事務局の、ラオスでは研究仲間であるNathan Badenoch氏(京都大学特定准教授)のご協力を得ました。記して感謝申し上げます。

文 献

- 1) 黄 布凡(主编): 藏緬語族語言詞匯, 中央民族學院出版社, 1992.
- 2) T. Shintani, et al.: *Linguistic Survey of Phongsaly, Lao P.D.R.* Institute for the Study of Languages and Cultures of Asia and Africa, 2001.